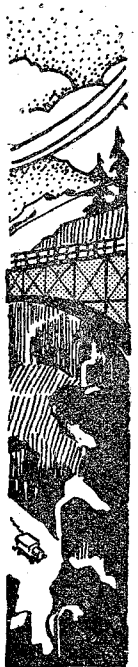




漫 録



東海道視察旅行案内記 (二)

静岡から

〔東京から一八八・五キロ
京都から三四三・五キロ〕

○静岡市 地は安倍川の東岸賤機山の南麓（往古には安倍川は山の後方を東に巴川の邊に流れたるかと思はる）に在る。丸子まで一里十六町、昔時國府のあつた處で延喜式の

横太驛で後に駿府又は府中と稱し明治初年静岡と改名せられた、東海道の要衝の宿驛に當り慶長十二年徳川氏此處に駿府城を造營した、其城址は今尙之を存し衛戍地となつて居る、静岡縣廳は即ち舊駿府城追手門内に在る、安倍川餅、安倍川紙、竹細工等は此地の名産である。

○淺間神社 賤機山南麓に在つて大己貴命（神部神社）木

花開耶姬命（淺間神社）大巖御祖命（大巖御祖神社）を祭神とし結構壯麗な建物で大拜殿の如き八棟三階造の有名なものである、社格は國幣小社、寶物として著名なるは山田長政が獻納したる暹羅國軍船の額である。

○安倍川橋「川越の肩車にてわれ／＼を深い所へひき廻したり」と喜多八が歌つてある處で十返舎一九の時代には橋なくて歩行渡であつたものだが明治七年宮崎總五氏（元土木局長宮崎道之助氏の祖父）が苦心慘愴の後甫めて架橋したのである、其顛末は川の橋畔に在る侯爵黒田長成公撰文に係る明治四十一年建設の安倍川架橋碑文に「安倍川橋在東海道舊津。宮崎君總五所架也云々」とあるを見て知ら

る所である其篤志の程は欽仰に値する、後明治三十六年靜岡縣營に移され長二百八十間幅十尺餘の木橋を架した縣下五大橋の一である。今の橋梁は大正十二年九月二十日竣工したもので「パウストリングトラス」鋼橋で四九〇・九〇九米有效幅員七・二七米松木塊を以て鋪裝す工費金五十八萬千八百八拾壹圓で一年半を費し靜岡縣營で架橋した。

丸子から

○丸子 安倍郡長田村の一部落となつて居るが昔時は鞠子の宿として五十三次の一であつた 安倍川を西に渡ると手越と云ふ彼の駿河國志に「手越は遊君の名所也、鎌倉殿の千壽の前、曾我五郎時宗が愛せし少將皆此驛長の家より出つ」とある、その手越も長田村内である。此里を過ぎて「世をいとふ心のおくや濁らましかゝる山邊のすまひならでは」と「驛路の鈴」の記者をして詠ませしめた地である。靜岡へは一里半で岡部へは二里六丁と云はれて居る。

宇津ノ谷峠 昔時業平朝臣が「駿河なるうつつの山邊の現

にも夢にも人に逢ぬなりけり」と詠せし蔦の細道は今の東海道とは別途であるらしい、勝栗毛にも「降しきる雨や霰の十だんど、ころけて腰をうつの山道」と駄句つて居るが矢張現今の東海道ではない、今の峠道は大正十五年一月起工し昭和四年四月に竣工した縣營改良工事で道路延長二、〇五二・九米幅員七米隧道延長二二七・三米幅員七三米最急勾配十五分ノ一で工事費は道路金拾貳萬參千五百餘圓隧道金拾七萬五千九百九拾餘圓合計金貳拾九萬九千五百貳拾參圓餘となつて居る。

岡部から

○岡部町 志太郡内に在つて藤枝町へ一里二十六丁の處である。宇津ノ谷の難路を越ゆると、やがて岡部の宿驛の地である。此邊の並木は立派なもので今を去ること七百年前の仁治年間に源光行が「これぞこのたのむ木のもと岡部なる松の嵐よ心して吹け」と詠して居るを見る。

藤枝から

○藤枝町 志太郡に在る昔の宿驛は其一部落で東海道國鐵の藤枝驛は同郡青島町前島に在るので相當離れて居る。今國道は此鐵道驛近くを通過してゐるが、約三百四十年前の慶長年代には北方瀬戸川を渡つて遠洲横岡村に出たものらしい。

○焼津 藤枝町の西方を東に流るゝ朝比奈川の川口の西に焼津町があるが鯉節の名産地で「我は日本人以上に日本を愛す」と言つた文豪小泉八雲氏は深く此地を愛し屢々來遊したと傳へられて居る、往昔日本武尊が東夷征討の際野火に出逢ひ名劍を抜いて草をなぎ立たと言はれてゐる地の一つである。

島田から

○島田町 藤枝から一里半の松並木を仰きつゝ行けば島田の宿場のあつた島田町に達する、大井川の東川畔に位する地で今は製材で有名な地となつた「島田よいとこ、大井川かごさる、山で木を伐る流し出す。流す木の數百萬石よ、

揚げた島田が山になる」と謡はれて居るのでも明かである。

○大井川橋 朝顔日記で有名な島田の宿を出て西に行けば屢々其流域を變じた川で、出水すれば川止めとなつて旅人に難澁を蒙らしめた大井川に至るのである。東海道旅行人をして「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」と唄はしめ又十返舎一九は膝栗毛で喜多八をして「蓮臺は乘しは結句地獄にて下りた處がほんの極樂」と蓮臺に打乗つて水嵩まき目もくらむばかり今や命をも捨てんかと思ふ程の恐怖を表現さして居るのを以て見るも此川の交通難が偲ばれるのである、明治十五年に至つて長七百二十間幅二間の木橋が架設せられ大井川橋と命名せられたが出水ある時に押し流されて交通が杜絶されたものだ、夫で静岡縣で架橋を企て大正十三年三月起工し昭和四年七月末竣工したものが今の「プラットトラス 鋼橋で長一、〇一九・一米有效幅員七・二七米日本松木塊を以て鋪裝す其の工事費は金七拾萬五千三百餘圓を費やした縣下五大橋の一つである。

金谷から

○金谷町 遠江國榛原郡に在る。金谷宿は町内の一部で此處から日坂まで一里二十四丁である、大井川を隔てて島田と相對するが新國道は大井川橋から町の北裏に出て、西、日坂に向つて金谷峠にと改築された、舊街道筋は氣の毒な事である。

○金谷日坂間國道改修——延長八、二二二・四五米の坂路を最急勾配十五分ノ一で國と縣とで施工した即ち縣施工の分は延長四、〇九四・二米幅員五・六米其工事費金參拾八萬九千七百四拾圓餘國施工の分は延長四、一一八・二五米幅員六米（内隧道一五〇米）其工事費金參拾萬參千二百四拾七圓餘で縣の施工は昭和四年四月國の施工は同七年四月竣成したのである。

○牧の原茶園 金谷町の南方榛原郡小笠郡に跨る舊大井川の作つたデルタの開折せられた礫層より成る一萬五千町歩の地、其大部分は茶園で其處に國立茶業試驗所、縣立農事試

驗場茶業部も設けられ昭和五年今上陛下の行幸あらせられた光榮を有する茶業地である、此茶園は明治二年の頃靜岡藩士中條金之助大草太起次郎氏等配下二百人を率ゐて開墾したが明治三年大井川が渡船となつた爲め川越人夫百餘戸生計の道を失ふに至つたので官之を愍み原野二百町歩金千圓を給して農業に就かしめ所謂失業救濟を行ふた此が今日の牧の原大茶園の基礎と爲つた。茶園の眺望は佳絶である。

○菊川 小夜の中山に差しかゝる菊川の溪流に沿ふて往昔の菊川の宿がある、彼の有名な前中納言宗行が「昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、今東海道菊河、宿西岸而失命」との絶命の一句を思ひ且は俊基朝臣の「古へもかゝるためしを菊川の同じ流れに身をや沈めむ」と詠したを見るもうたた旅情の哀愁を催さしむるものがある。

○小夜の中山夜泣石 小笠郡日坂村小夜の麓に在る、小夜の中山は「左に深谷右も深谷、一峯ながきみちは堤の上に似たり、兩谷の梢を眼下に見て群鳥の轉るを足の下に聞く、谷の兩片は高く又山の間をすぐれば中山とは見たり云々」

「わけ登るさよの中山なか／＼に越へてなごりそ苦しかりける」との舊記に徴し舊街道は山嶺を通行したもので彼の新古今の「年たけてまた越ゆべしとおもひきや命ありけり小夜の中山」とよみたるを見ても大なる難險であつたことが思せらるゝ。芭蕉翁が「馬にねて残夢月遠し茶の煙り」との一句では曉の旅も偲ばれて、限りなき感とする。此舊道に夜泣石がある。其石の傳説を見ると昔、日坂に姪身の女ありて金谷宿の夫に通ける、或夜此小夜の中山に山賊出て戀慕し従はざるによりて斬り殺し衣裳を剥き取りて行方知れず此婦の日頃念する觀音出て、僧と現し亡婦の腹より赤子を出し、あたりの賤の女に預け、飴を以て養育させ給ひけり、其の子成人の後「命なりけり小夜の中山」と常に口ずさみ、諸國を巡りて終に池田の宿にて彼の盜に逢ひ親の敵を討ちしと云ふ、今日猶峠の茶屋にて飴を賣り居るもかかる因縁あるからである。

日坂から

○日坂村 小笠郡内で小夜の中山の西麓にある五十三次の一宿驛であつた地である、此處から掛川へ一里二十九丁で其間くじら山、男くじら山などがあつて、わらひ餅が名物である。「名にめてゝねぶるばかりの蕨餅、我しりにきと人に食はずな」との土御門殿の一句がある。

掛川から

○掛川町 小笠郡内に在り袋井へ二里十六丁の處で昔の掛川宿は一部落となつて居る、永享四年雅世郷紀行に「旅衣袖にも浪を懸川やぬれていとほぬ今日の雨哉」とある懸川は矢張今の掛川で懸川城址が北の山岡にあるが天正十八年徳川家康之を山内一豊に與へ一豊土佐に移るまでは此城にありしと云はれておる、此町の街道か八曲りと稱せられ隨分曲折して居ることは有名なものである。花こさか名産である。

袋井から

○袋井町 磐田郡に屬する一邑で見附まで一里半の處に在る昔時五十三次中の小驛の地である。

見附から

○見附町 磐田郡の大邑であつて昔時の宿場は町の一部分となつて居る、濱松へ四里七丁で今の東海道は南の方中泉町に出て西折して天龍川を越へて濱松に至るのであるが昔時鎌倉時代では南折せず見附から西に天龍川の東岸池田町に出たものであるらしい、されはにや俊基東下りの條に「池田の宿につき給ふ、元暦元年の頃かとや、重衡中將東夷の爲めに囚れて此宿に着給ひしに東路は埴生の小屋のいふせきに故郷如何に戀しかるらんと長者の娘がよみたりし其いにしへの哀まで思ひのこさぬ涙なり」とあるを見る。又十六夜日記を見ると「遠江見附と云ふ所にとゞまる、里あれてものおそろし、かたはらに水の口あり、誰れか來て見附の里と聞くからにいと旅寢の空恐さ」とあるから一時荒廢したこともあると思はる、町はつれに熊野御前の手植

の櫻があつたと傳へられてゐる。此熊野は平宗盛の女官であつたが「いかにせん都の春もおしけれどなれし吾妻の花や散るらん」との名歌を詠して病母の見舞に歸國を許された孝女であつた。其墓は池田に在ると言はれて居る。見附から南に折れ中泉に出て中泉から西に行けば天龍川に出づ。

○天龍川橋 川の名を耳にするたに其急流で交通上の難所が思はるゝ「水上は雲よりいでゝ鱗ほど波のさかまく天龍の川」と詠せられ「天龍下ればしぶきがかゝる持たせやりたや檜笠」と唄はれて居る大川で源を信洲諏訪湖に發し西南に流れ伊奈を経て南に轉し遠州山香の山中に入り數川を併せて掛塚で海に入り四十八里を流れてゐる、東京と京都との略中間に在る處で渡船で渡つたが、明治の初年官の許を得て鈴木某淺野某等が長六百四十六間幅二間の橋を架け賃取橋とした後静岡縣で買収した、此假橋の危険を避け交通の利便を大ならしむる爲めに「ワイレントラス」鋼橋を長九一九・四七米有效幅員七・二七米、アスファルトボックス舗装とし工費金百貳拾六萬參千六百餘圓を以て靜

岡縣營で昭和四年四月起工し同八年六月三十日竣工した是が縣下五大橋の一である今の天龍川橋である。

濱松から

〔東京から二六六・五キロ
京都から二六五・五キロ〕

○濱松市 天龍川と濱名湖との中間に位し東海道信濃街道の相交錯する交通上の要衝に當る。昔時濱松庄と唱へられ永祿年間徳川家康岡崎より移りて居城し濱松城と稱することとなつた、其城址は今尙之を存す、徳川時代は此城下の街筋至つて狭かりしものか遠州濱松は廣い様でせまい横に車が二丁立たないと傳へられたものであつた、今では中々改良せられて居る、赤穂義士の一人神崎與五郎が馬追丑五郎の侮辱を買ひながら望ある身を顧みてならぬ堪忍を堪忍したと云ふ譚は此城下であつたことだ、本市には日本樂器會社でピアノやバイオリン其他の樂器が作製せられ有名であるが帽子も帝國製帽會社から多量に製作販賣せられ氷砂糖や綿織物なども中々製作販出されて居る、濱納豆は汽車旅客の周知する産物である。

○三方ヶ原 市の北約二里の處三方原村に三方原古戰場がある、元龜三年十二月（約三百六十年前）武田信玄徳川家康の兩將が大決戦を爲し家康が大敗した古戰場で其碑などがある。

舞坂から

○舞坂町 濱名湖今切の東岸に在る一邑であるが昔時の舞澤宿驛の址は今はなし、源光行海道記に「濱松の浦に來りぬ、林の風に送られて廻澤の宿を過ぎ遙に見渡して行けば岡の邊に森あり、野原に澤あり」とあるから此邊にありし宿驛と見らるゝが今の舞坂町は徳川時代にはともかく東海道の一驛となつた處である。東海道膝栗毛には「舞坂を乗り出したる今切とまたたくひまも荒井にそつく」とあるを見ると百年前には舞坂と荒井との間は海上一里の渡であつたものと見られる。

○濱名湖 濱名湖は濱名郡内に在る半鹹湖で面積凡五方里南方遠洲洋に通ずる處を今切と云ふ、古昔では遠淡海と呼

ばれた、此湖口の開塞は幾多の變遷があつて橋を架けたり渡で通したりしたものだ、今切の開かれたのは明應七年八月二十五日(四百三十四年前)の地震に依るものである、此湖は東海道中の支灣多き佳景地で夏季海水浴場が開かれる

○辨天島 濱名湖中の小島で南北辨天島となり分れて四島となつて居る、明應永時代に桑滄の變があつて島となつたもの、其始め象島と稱せられたが延寶年間辨天島と名付けられた、島は大平洋を望み洋と湖との境、白浪の立つあたりは面白き光景である。又夜中漁火の明滅することなど一奇觀であるが東北の空八采の芙蓉峰を遠望すれば北齋の靈筆も尙及ばざるの觀がある「今切や富士より月の一千里」とは東海道名所圖繪に載せられて居る一句である。海水浴場の設備など完備したものである、此島に近き舞坂地内には明治元年以來四回明治天皇の御小憩あらせられた史蹟(舊本陣)がある。

○濱名湖橋 中濱名橋と西濱名橋との全長六五六・六二米 有效幅員は中濱名橋七・二七米西濱名橋七・六四米、鋪裝

は中濱名橋「シートアスファルト」西濱名橋「アスファルトブロック」取合道路延長二軒三五三八有效幅員一米で金八拾八萬餘圓を以て靜岡縣營で大正十五年七月下旬起工し昭和七年八月竣工した縣下五大橋の一である。

新居から

○新居町 濱名郡に屬し今切の西岸に在る、荒井とも作る東海道宿驛の一であつた處で此地から次驛白須賀までは一里二十四丁と稱せらるる。

○新井關址 今切關又は新井關と云ふ關址は新居町東に在る、史蹟名勝天然記念物保存法に依り大正九年に史蹟として指定せられた。關東重要の關は箱根で東海道中の要衝としては今切の渡口を押へて居る關が尤も重要視せられたのも故なき事でない、此關は女及鐵砲の類は證文なきもの越ゆるを許さず又上使及繼飛脚の外は夜中一切の通行を禁ぜられた、今の新居町役場は當時の面番所である。

○潮見坂 新居を出て、西北に行くと白須賀に近き處小坂

がある之が古來有名な潮見坂で古松落々として南は遠州灘渺々漫々太平洋に連り、雲か浪か天を浸し其壯觀譬へ難く眺望の濶大を以て稱せらる、林羅山は「天地豈識幾層濶、舒卷古人方寸端、滿月不遮潮見坂、大鶴飛盡水漫々」と詠したものである、明治元年聖上東幸の際鳳輦を駐め給ひ此偉觀を賞せられたる聖蹟である。

白須賀から

○白須賀町 遠州濱名郡の最西端に在る東海道の一驛である、參州二川へ一里半・元祿年中までは潮見坂の崖下海洋に濱したる驛であつたが洪浪の爲高師山の中に移つたものと傳へられて居る、古歌に「沖つ風音も高師の山越へて打寄浪のしらすかのはま」とあるを見る。

二川から

○二川町 愛知縣渥美郡内の東南隅に在る地で東海道宿驛の地は町内の一部となつてゐる、春曙紀行に「玉くしげけ

ふ二川のあげゆけば是も三河の内とこそきけ」とある處である、二川宿の北方に大岩山がある岩石奇にして龜岩の如く最奇觀である、其岩下に岩屋觀音があるのは人の知る所である。豊橋へは一里半餘である。

豊橋から

〔東京から三〇六キロ、
京都から二二六キロ〕

○豊橋市 昔時三州吉田と稱し東海道五十三次の重要な宿驛で吉田川即ち豊川の南岸にある都市である「吉田通れば二階から、ちよいと招く、しかも鹿子の振袖が」と唄はれた地で春濤の詩中に「招客古謡稱吉田、樓佳妓妙久喧傳」とあるも故あるかなである、明治二年吉田を豊橋と改名し軍事的都市として發達したが近時工業都市として更らに發展しつゝある。産物としては米と生絲と麻真田である。

○豊川稻荷 豊橋市の北方約半キロ寶飯郡豊川町に嘉吉年間（約四百年前）僧東海の創建に係る曹洞派妙嚴寺がある、其寺吒枳屈天堂に稻荷が祭られてゐる、天保年間以降參詣者頗る多きを見るに至つた。一年間約百萬人に達す

と言はれて居る。

○國道分岐地點 三十號路線（第十五師團司令部所在地に達する國道）は豊橋市大字札木に於て一號路線と分岐して居る。

○長篠古城址 豊橋市より北方遠く寶來寺鐵道長篠驛の西方約半軒長篠村大字長篠三輪川と寒狹川との合流地點にある要害の地に長篠古城址がある、此地で天正三年（約三百六十年前）武田勝頼と徳川家康と相戦ひ武田勢大敗した史蹟である。

御油から

○御油町 豊橋市から二里半餘の地、寶飯郡内にある東海道宿場の一である。膝栗毛で見ると彌次が「そのほかでとめだてなさば宿の名の御油るされいと逃げて行かばや」と唄はして居る所である、此處から次の赤坂までは纒かに十六丁である。御油と赤坂との間に松並木がある喜多八野狐を恐るることを述べてあるは此並木街道に種を求めたもの

であらう。

赤坂から

○赤坂町 此町も亦寶飯郡に屬する、藤川へ三里九丁の所で東海道の宿場であつた頃は矢張遊女多くありしと見へる俳聖芭蕉の句に「夏の日ごゆより出で、赤坂や」とある、有名な入宋僧寂照が俗人なりし頃花顏春こまやかにして蘭質秋かうばしき女有り之れに契を結んで妾としたが後出家したものだと傳へられて居る。

○鉢地坂隧道 本隧道の路線は府縣道にして額田郡形埜村大字切山を起點とし南下、豊富村本宿村等を経て本宿に於て國鐵東海道線及び國道東海道を横斷し、寶飯郡蒲郡に達する路線である、産業道として觀光道として交通運輸上に資する處少なきのみならず國防上に於ても重要な道路である、此隧道は額田郡本宿村と寶飯郡蒲郡町との間延長四六八・四三米内幅五・一五米内高四・七米で硬岩部は無卷立とし軟岩部には○・三一〇・四五米厚の混凝土卷立を施し

路面は混凝土を以て鋪裝す、此工費金十萬五千圓で愛知縣營にて昭和七年四月起工同九年一月竣功したものである。

△蒲郡〔府縣道本宿蒲〕〔東京から三三四キロ〕〔郡間一〇キロ〕〔京都から二〇八キロ〕

寶飯郡蒲原町は赤坂と藤川との略中央本宿村で東海道國道と分岐し南下し鉢地坂隧道を経て本宿から十キロの地點に在る風光地である、東西北の三面は山に圍まれ府相の臺地東南に延びて海に迫り、古松斜に崖に懸る所、前面波靜かなる海上には翠色滴る竹島がある、龜岩大島小島の諸島は添景の一である。遙かに渥美半島の山容を遠望し漁舟客船の去來するを見るの光景の如き實に筆紙のよく盡す所でない。

藤川から

○藤川村 額田郡に在る五十三次の一で岡崎へ一里半の東に位する淋しき農村であるが往古からの宿驛ではない、いつの頃であるか明かでないが十返舎一九は彌次をして「ゆ

で蛸のむらさきいろは軒ごととにふらりとさがる藤川の宿」と唄はしてゐる。誰か住む都のたつみしかはあらで此はあづまじの宇治川の里」との古歌は此宿を詠じたるものであると言はれて居る。此地と岡崎との間に大平川がある其川に架する大平橋は中央は混凝土で作られて他は木橋であつて、行人をして其工法の奇態なるを怪ましむるものがあるが此は大正時代に氾濫して中央が落ちたので其の復舊工事を政府の補助に依り斯くは修理したものだとの事である。

岡崎から

○岡崎市 元西三河の大邑で昔時菅生と稱せられた。矢作大平二川を帯び徳川幕政時代の初めに宿驛となつた地で爾後五十三次の一となつた。往昔の街道は南方明大寺を過ぎたものである。東海道國鐵は遙かに一里許の南方を通過するが此は該鐵道敷設の際其通過を峻拒した結果であると傳へられてゐる。此地は徳川家發祥の處である「岡崎女郎衆はよい女郎衆」との小唄がある。又三河萬歳と稱するもの

は此地の風俗を演じたものである。此處の名産八丁味噌は普く世に知らる、近年は製糸製綿紡績織布などの工業品を産する。

○市内一號國道改良 市内の路線は曲折甚しく而かも狹隘であつたので愛知縣では之が改良を企て國庫の補助を受けて大正十三年三月起工し昭和八年六月竣工した其延長二、五四五・四五米幅員一〇米乃至一〇・一八米兩側に三・六四米歩道を設く其工費金百八萬九千八百七十餘圓を授じたもので昔日の面目を一新し交通上多大の利便を與ふること甚大である。

○岡崎城址 城址は市の西部一帯を劃せる丘上に在る、昔は菅生川に臨み西に矢作の清流を控へ俗諺に「五萬石でも岡崎様は城の下まで船がつく」とあるは水運の便を説明したものである。今は市の岡崎公園となつてゐる、城西を流るゝ矢作川には矢作橋と稱する大正二年に架設した近代式の鐵橋があるが其延長百五十間五尺幅員三間半で昔時は木橋であつた、豊臣秀吉が其幼時蜂須賀小六と結縁したとの

譚を遺すは矢張此處である。

○八ツ橋 岡崎から矢作橋を渡り矢作町をすぎて西北に行くと約三里半知立町の東端に八ツ橋の舊蹟がある、地はかきつばたの名所である、今尙無量壽寺の境内に古池があつて其名殘を止めてゐる在原業平朝臣が東向の途次此地に足を止め「からころも、きつゝなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞおもふ」と詠じたことのあるは人のよく知る所である。又平治物語にも「夢だにもかくも三河のやつはしをわたるへしとは思はざりしを」とあるを見る。

知立から

○知立町 碧海郡内の一邑で五十三次の一宿驛であつた、池鯉鮒又雉鯉鮒とも稱せられた、鳴海へ三里岡崎へ三里半、古き狂歌に「此の里の名におひたりとおさかなの料理をしたる池の鯉鮒」とある。

○依佐美無線電信送信所 知立町の南方碧海郡依佐美村に在つて日本無線電信會社の經營に係る送信所で空中線は二

五〇米組立大鐵塔八基で送信装置の機械類は獨乙デレフンケン會社の製作である、波長一七、二〇〇米、ナウエン(獨)サクターズ(佛)ワルソー(波蘭)及英伊和等歐洲主要國の大無線局を對手局として通信してゐる(受信所は四日市市)

○碧海郡知立町愛知郡豐明村間一號國道改良 我國第一の

重要幹線道路で往昔宿驛交通以來繁盛を極めた本道路線も幅員の狹隘と屈曲と路面の粗惡とは近時交通量の激増に對し不便不利を感ずる所深甚である、仍て昭和八年度時局匡救事業として政府直轄の下に内務省名古屋土木出張所にて施工した、其延長四、四一三米有效幅員一米で工法は知立町と豐明村との中間富士松村大字逢見地内に於て約一、九〇〇米の部分は從來の屈曲を直線道路に變更し其他の部分は概ね現道の擴張、勾配の緩和局部隅切等に依り改良を施し往時を偲ぶ松並木の保存に留意し知立町地内六二五米及富士松地内一、四九二米は「アスファルト」其他は全部混凝土を以て鋪裝す。工費金三十四萬一千圓(三分ノ二國庫支辨三分ノ一愛知縣負擔)昭和八年四月着手同九年七月竣工

した。尚豐明村地内愛知鐵道豐橋線の交叉地點に於ては交通上の安全を圖る爲め愛知縣は直徑間一二・八四米斜徑間一八・八〇米斜角四〇度幅員一米複線式下路鋼鈹橋を工費金六萬三千圓を以て施工し昭和十年三月竣工の豫定を以て施工しつゝある。

○桶狹間古戰場 知多郡有松町の東郊國道の南側に三方丘陵を以て圍まれた窪地がある、此が桶狹間古戰場で永祿三年五月十九日駿遠三の太守今川義元が四萬五千の大兵を率ひて上洛せんとし破竹の勢を以て尾張に入り織田信長部下の諸城を陥れ氣おごりて此地に祝宴を開き休息中、信長の爲めに奇襲せられて大敗した場所である。今川治部大輔義元の墓、桶狹間弔古碑などが建設せられてゐる。

○有松町 此地は宿驛ではないが有松絞りで名高い所である。膝栗毛にも「ほしいものありまつ染に人の身のあぶらしぼりし金にかへても」とあるが此有松絞は慶長年中竹田庄九郎が創製し驛路の傍に店を出して販賣したが夫れから發達して大厦軒を並べる盛況を呈したものである。

鳴海から

○鳴海町 愛知郡に屬し名古屋市と相接して居る、東海道五十三次の一驛として繁榮し有松絞りの如き鳴海絞として廣く賣出されたものである。藤栗毛にも「旅人のいそげば汗になるみかたこゝもしぼりの名物なれば」と記されて居る。

○鳴海貝塚 鳴海町宇雷にある昭和二年五月道路開鑿に當つて偶然發見せられしもので土器、石器、骨角器、人骨等の古遺物が多數掘り出された、土器は彌生式に類して繩文系と見らるべきものであるとのことである。

○鳴海潟址 今は陸地となり舊形を詳かにすることを得ざるも笠寺星崎の南、大高の北、天白川の末にある干潟なりしならんと思はる。新古今に「浦人の日の夕暮になるみ潟歸る袖より千鳥啼くなり」とあり、又十六夜日記には「故郷は日を経て遠くなるみ潟いそぐ潮干のみちぞくるしき」とある、鄙曲海道くだりを見ると「恵みにあふ鳴海潟干潟も遠く浦傳ひ、天照神は星崎に、光りもくもらぬ世にあれ

ば願をみちの汐風も猶吹きおくる兩村山云々」とあつて鳴海の干潟は歌人の情緒をそゝる所であつたと見える。

○笠寺一里塚 鳴海町から西行し天白川に架する田ばた橋を渡り名古屋市に入ると同市南區笠寺町に尾張四觀音の一である天林山笠覆寺(笠寺觀音)がある其南約五町の所に、慶長九年幕府の定に依り街道の左右に一里塚が築造せられた、其西側のは破壊せられたが東側のものは高さ約十尺の塚上に目通八尺の榎の大木が鬱蒼として繁茂してゐる路政上の一遺跡として保存せらるゝものである。

名古屋熱田から

〔東京から三八四キロ〕
〔京都から一四八キロ〕

○熱田町 名古屋市の南端に在りて鎌倉時代から宿驛となりて宮の宿と稱し五十三次中有名な一宿となつた、芭蕉翁此地に來りて「海かれて鴨の聲ほのかに白し」と吟じたることがある、海陸の通衢なりしことは諸種の文献に依つて證せらる。昔は此宿から海路桑名に渡ることを順路とした、之を七里の渡と稱した、天候悪しく風強き時は此處か

ら海部郡佐屋村佐屋に上り木曾川を渡りて桑名に出てゐたもので其行程はいわづかへ二里、岩塚からまんばへ半里まんばからかもりへ一里半餘かもりから佐屋へ一里半餘佐屋から桑名へ二里で矢張り七里半餘りであつたものである。陸栗毛で彌次が「おのづから祈らずとも神います宮のわたしは浪風もなし」と詠じて此海路を取つたものと思はる。今日熱田から桑名までは約六里(二十四キロ)の行程である。

○名古屋市 名古屋市は濃尾平野の東南隅に位し南は伊勢海に臨み名古屋港を構へたる地で、愛知縣廳は市のやゝ北部中區新榮町に在る、此地往昔は那古野と稱し人煙稀薄な廣野原であつたが慶長十一年徳川家康其子義直を尾張に轉封し名古屋城を築かしめた、爾來發展して東海の樞要地となり今や我國第三位の大都會となりて中京として繁榮を來して居る。

國道一號線は東、鳴海町から迂曲しながら市の東を界する天白川に架する田はた橋を越へて市内に入り笠寺觀音の西をやゝ北に折れ山崎橋を渡り呼續町を西に熱田橋を経て

熱田傳馬町をすぎ熱田神宮の東側市場町に出づ、夫れから大瀬子橋を経て南に千年町を西に東海橋、土古町、當知町をすぎて明徳橋を越へ下一色から蟹江町を経て尾張大橋に出て居る。目下名古屋から木曾川まで新に近代的道路が築造せられつゝある。

○國道分岐地點 國道十二號路線(石川縣廳所在地に至る路線)は熱田市場町に於て一號國道路線と分岐しておる。

○熱田神宮 南區熱田町新宮坂町に在る官幣大社で草薙大御劍が奉祀せられて居る、往古日本武尊の妃宮竇媛命が此地に神劍を奉齋せられた時に始まり、今は天照大神、素盞鳴命、日本武尊、宮竇媛命、建稻種命の五柱をも正殿に配祀せられて居る、皇室の御尊崇厚く國民また普く尊信するところである。

○名古屋港 名古屋港昔の熱田港は東海道の要津に當り古來船舶の交通を見た所で桑名へ「七里の渡」又は「宮の渡」と稱せられ其の港灣として如何に樞要地たりしかは想像に難くない。徳川幕府が出入の船舶に制限を加へた時代はと

もかく明治維新以來交通の發達するに従ひ港灣の必要世の認識する所となり且明治十年の戦役は本港の利用を感ぜしめた。然るに時勢の進運は更らに一段築港の急務なるを告げたので、明治二十九年第一期の修築工事に着手して以來三十餘年間其工を進め資を投ずること金三千七百餘萬圓、今や第四期工事の施工中であるが、明治四十年十一月指定海外貿易の開港場として許され、昭和七年に於ては實に貿易總額二億七千二百萬圓に達し本邦四十有餘の開港場中第四位に在る狀況である。

○中川運河 名古屋驛と名古屋港との海陸連絡を完ふし且運河沿線の地に一大工場地帯を作らんことを企て、都市計畫事業として開鑿したものである。其形式は閘門式で總延長八、三〇九米幅員九〇・九米で舟溜三ヶ所河床は平均三米の深を有して居る工費金千九百三十九萬二千圓で昭和七年十二月一部を除き竣工した。

○名古屋城址 名古屋城址は市の北部に在る、此城は徳川家康が其子尾張藩祖義直の居城として築造せしめたもので

ある。當時築城法に妙を得たと云はれた加藤清正を御城築總大將とし北國西國等の諸大名二十二名に命じて慶長十五年二月起工し翌十六年の末（三百二十四年前）に略竣工した。天守閣は特に清正が獨力造營を引受けたもので、宏壯なる石疊の上に白壁造りの五層の樓閣が毅然として聳えて居る。居城も亦慶長年間の建造で其構造堅牢華麗を極めたものであつたとのことである。廢藩後一時陸軍の管轄となつたが明治二十六年六月舊本丸西丸及御深井丸の區域を以て名古屋離宮と定められ、同三十年以來明治天皇、大正天皇今上天皇御三代に亘つて兩陛下皇太子殿下の行幸啓の際御駐泊あらせられたること四十一回にも及んだ。然るに昭和五年十二月十一日離宮を廢せられ特別の御思召を以て土地建物の全部を擧げて名古屋市中に御下賜になり爾後改めて之を名古屋城と稱することとなつた。此名古屋城の區域面積は四萬三千九百餘坪であつて御殿天守閣各樓門等の建造物は御殿内部多數の古美術品と共に悉く文部大臣から國寶に指定せられた。又御殿内には宮内大臣の許可を得て玉座

を其儘に保存し外苑御深井丸の中央には賢所假殿の御址がある。天守閣の屋上に燦然として輝く金鯨は高さ南方八尺三寸北方九尺二寸胴廻南方六尺五寸北方六尺八寸五分で木材を身とし、鉛及銅に金を張合せて作つたもので其金の分量は慶長小判で一萬七千九百七十五兩であつたと傳へられて居る。

○愛知郡下之一色町海部郡彌富間國道改良 本路線は國道

一號路線で名古屋より桑名に至る東海道としての唯一の幹線であるが、從來の道路は幅員頗る狹隘を極め、且屈曲少なからざるのみでなく、幾多の橋梁亦不完全で近時の交通状態に照らし不適當である。而も三重縣との境に在る木曾揖斐、長良の三大川に架橋の事ありて愈本路線改策の必要を痛感し昭和六年内務省土木出張所で失業救済事業の許に政府直轄工事として海部郡蟹江町と同郡彌富町間の改良事業を施行し、次で翌七年度に産業振興の爲に愛知郡下之一色町と蟹江町間の改良を施行し同八年度では時局匡救事業として下之一色町地内庄内川橋梁の改造を行ひ方に全部の

竣功を告ぐるに至つた。即ち其延長六、六八四米有效幅員一、一米工費總額金百二十四萬八千九百十六圓（三分ノ二國庫殘愛知縣負擔）を以て昭和七年六月に竣功した一部分が蟹江町蟹江川左岸から彌富町荷ヶ須新田間、延長四、六六一米有效幅員一、一米工費金九十三萬五千圓（分擔率同上）で昭和九年九月竣功した部分が下之一色町庄内川右岸から蟹江町蟹江川左岸間延長五六六米（内庄内川橋梁二〇三米）有效幅員一、一米乃至一七米工費金三十八萬五千六百圓（負擔率同上）で昭和九年九月竣功した部分が下之一色町庄内川右岸から下之一色町名古屋市堺間である。斯くの如くして愛知縣下の參宮道路は完成を告げ、交通上に多大の利益を賦與することとなつた。

○尾張大橋と伊勢大橋 木曾、揖斐、長良の三大川は三川分流の法を施行したる後洪水の被害を減少することを得たが、七里の渡廢せられて此三川は渡船を以て交通の便に供へたるのみで一旦出水すれば忽ち川止となり其不便利は名狀すべからざるものがあつたのみでなく、自動車の發達

は愈橋梁架設の急務なるを告ぐるに至つたので、大正十一年漸く愛知三重兩縣で協議を遂げ木曾川に架する尾張大橋は愛知縣で揖斐長良二川に架する伊勢大橋は三重縣で施工することゝなつて、今日二大橋の完成を見るに至つた。名古屋市より岐阜に廻り五時間を費やしたる自動車の運轉は一時間半を以て桑名に達することとなつた。

尾張大橋 愛知縣海部郡彌富町三重縣桑名郡長島町間に架し延長八七八・八一米有效幅員七・五〇米橋型は補剛構桁付繫拱十三連、橋臺は杭打基礎にて鐵筋混凝土構造、橋床は鐵筋混凝土床版とし「アスファルトブロック」を以て鋪裝す工費金百五十六萬圓昭和八年十月竣功した。

伊勢大橋 三重縣桑名郡長島村桑名町間に架し延長一、一〇五・七〇米有效幅員七・五〇米橋型は補剛構桁付繫拱橋十五連橋臺は杭打基礎にて扶壁式鐵筋混凝土構造橋床は鐵筋混凝土床版とし「アスファルトブロック」を以て鋪裝す工費金百七十五萬圓昭和九年五月竣功した。

○前號東海道視察旅行案内記中正誤補遺

頁、段、行、字

- 一〇二 上 一 二 東京日本橋「京都から五三
- 一〇三 上 四 からの下 二キロ」を脱す
- 一〇四 上 二 「五一〇、百二萬圓
- 〇〇〇圓」は

程土谷からの前に左の一項を補ふ

○國道分岐地點 國道三十一號路線

(東京市ヨリ横須賀鎮守府所在地ニ遠スル路線)と國道一號路線とは横濱市中區機木町七丁目に於て分岐し三十一號路線は神奈川縣久美岐郡金澤村を經由横須賀市に至る

- 一〇五 上 七 一區は 一區
- 一〇六 下 四 石壘は 石壘
- 一〇七 上 一四 「元昭」は 天和
- 同 同 一五 其の「其」の 其を除く
- 一〇七 下 五 「一夜とも」の下宿を加ふ
- 一〇八 下 八 「庭」は 延
- 一一〇 下 二 「〇」の下 「蒲」を入る
- 一一二 上 五 「夫」は 苺